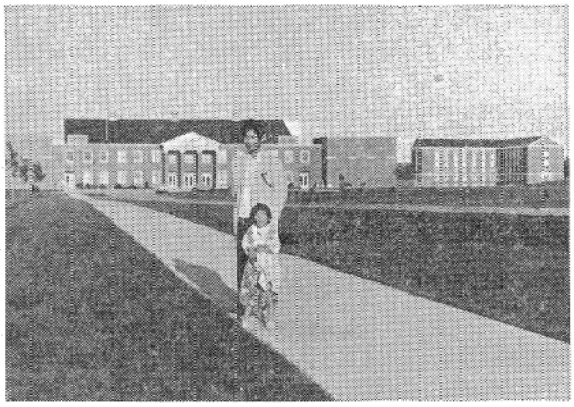
Coffee Break

大阪大学工学部応用化学科　足　立　吟　也



St.F.X.U の体育館と前庭

筆者は家族と共に1年半，カナダの東端，大西洋につき出たノバスコシア州のアンチゴニッシュという人口6千位の小さな町ですごしました．ノバスコシア（Nova Scotia）は日本ではあまりなじみのない地名ですが New Scotland の意味で住人もスコットランド出身者の子孫が大部分をしめています．MacDonald, MacDonell, MacDougall 等 Mac あるいは Mc ではじまる姓をもつ人がほとんどです．Mac はスコットランド地方語（ケルト語）で「息子 son」の意味でマクドナルドならばドナルドの息子ということになります．さて，この田舎町にやって来たのは，ここに所在する大学（St. Francis Xavier University）の化学教室で postdoctral fellow として働らくことになったためです．名であきらかなようにカソリックの学校で，要職には黒装束の神父が任にあたっていました．もっとも牧師養成の神学校ではなく，普通の総合大学ですから小生達のような，異教徒も受け入れてくれたわけです．出発前，先輩にアメリカの大学のきびしさを充分きかされていましたので，となりのカナダでも同様だろうとびくびくしながら出かけましたが聞くと見るとは大ちがい，いたってのんびりしたものでした．その平均的な一日を小学一年生の日記風に記述しますと次のようなものです．

朝8時をかなりすぎたある時刻に目を覚まし妻を起こして朝食の準備をさせ，今朝は「寒い」とか「暑い」とかいいながらゆっくりたべて出かけますと9時すこし前に研究室に入れます．装置の電源をONにしたり，ぼつぼつやって来る教授や同僚に朝のあいさつなどしていたら10時すこし前になり，研究室内外がなんとなくそわそわしはじめます．イギリスおよびその植民地でのあの有名な Coffee break がはじまるのです．まず大学内にある郵便局（この町には自宅への配達はなし各自，town か大学の Post Office にとりに行かねばなりません．）の私書箱を調べて手紙や小包を受けとって，その足で Faculty Lounge という教職員のみが入れる休憩所に行き，無料のコーヒーか紅茶を飲んで同僚たちと30分～40分おしゃべりするのです．英，仏語はもとより，ウルドウ（インド，パキスタン）なども聞こえミニ万博といった感じです．この大学は学生数5～6千のどちらかといえば小さなものですが教授は世界各国からあつめられており，オランダ人やポーランド人もいます．専攻も人種もまったく違う人達がなんとか共通の話題をみつけてがやがやっている姿は休息をはるか通りこして，一種の真剣勝負です．もっともこの break を休息とみるか，食事の一つとみるかは意見のわかれるところでしょう．いずれにせよ，この習慣はかなり徹底しており，小学生もこのためおやつをもって登校するほどですまた Office のほとんどはからっぽで留守番すらいません．先日，テレビ映画をみているとイギリス貴族出身の将校が戦死した部下を葬る手

間すら惜んで Coffee break をする場面がありましたが，なるほどと思いました．数百年以上も続いた習慣をたかが戦争ぐらいのことで中断などできるものかといったところにちがいありません．

さて，Lounge での話題は人のうわさがほとんどというのはいずこも同じですが，国際問題たとえば印パ戦争の時など印度大陸史の講義もしくは討論会，いやむしろミニ国連安保理事会のごとくなりました．「Kick out the Pakistani! パキスタン撃つべし」「Nehru did mischief. ネール首相が悪かったんだ．」etc. こちらは語学のハンディキャップに加えて，事件の背景がよくわからないのでぼかんときいているのみです．またカナダ経済の不況についてもよくきかされました．御存知のようにカナダ国内の主要な産業には米国資本ががっちりくいこんでおり，アメリカの景気の影響をモロに受けるわけで先年来の不況の波をかぶっております．したがって失業率も高く，これが製造業のみならず，ついには大学や高校の教職員の首にまでひびき出したようです．同僚のうち，次の職場のきまっていない連中の不安は小生にも充分察せられました．

カナダの大学は大部分，私立ですが，連邦および州が財政の大巾なサポートをしていて，事実上は国公立のようなものです．学生の授業料も小生のいた大学では年648ドル，バス，トイレ電話付き個室の寮に入っても1400ドル程度でそれほど高くはありません．研究に対する予算も NRC(National Research Council of Canada) を通してほとんど国がめんどうをみているようです．小生の給料も NRC から出ていました．NRC はそれ自身が大きな研究所でもあり，一昨年ノーベル化学賞を受賞した Hertzberg 博士もその一員です．ここでは基礎的，理論的なものから公害，山火事の消し方まで広範囲な研究が行なわれています．

Coffee がおわると再び研究室にもどって，warm up の充分すんだ装置で実験をはじめるわけです．初期バラツキがなく，スムーズに測定ができます．これが10時30分～40分ごろ．

ランチタイムは12時から1時半まで，皆，自宅にかえって昼食をとります．午後1時半に再びやって来て実験をつづけるのですがすぐ3時になり，ここでもう一度 Coffee をのむことになります．やはり30分ほど新聞などを読みながら談話をつづけます．小生などはこの時間に同僚と週末のピクニックや夜の招待の打合せをよくしたものです．このあと5時すぎまで，仕事をして，きりのついたところで帰宅となります．

セミナーなどがあるときは夕食後7時ごろ三度目の登校をするわけです．ちょっと考えるといったり来たりして Coffee をのむだけのようですが，これも皆，大学のすぐそばに住んでいるからで，以上のようなことが，仕事をしつつできるわけです．

セミナーのあと，講師をかこんで，ウイスキーなどのみながらまた雑談です．おわって，自宅に向かうころは，公共の交通機関もないこと故，当然，大部分の人は飲酒運転することになります．金曜の夜は同じ Lounge でバーがひらかれ，夫人同伴で50セント払込むとスコッチや，カナディアンクラブなどが味わえるしくみになっています．コントラクトブリッジクラブも同時に開帳し1時ごろまでプレイしております．

以上が一日の生活の時間経過を中心としたものです．我が国の場合とくらべてうんと slow pace のような印象をあたえますがさにあらず，かなり能率的なのです．小生自身の場合も比較的仕事がうまくいき，報文を2つ出すことができ，なお3つ目もかなりの線までできました．官庁などの事務処理も意外にすばやく，小生と家族の Visa のかきかえも出張して来た係官がすぐ目の前でやってくれましたし，運転免許も臨時のものではありましたがテスト合格と同時にくれました．このように Speedy なのは日本にくらべ，窓口をうけもつ係の権限がきわめて大きく，彼の判断でどんどん処理できるためと，もう一つはわれわれを実に信頼していることで，証明書ぬきで口頭の申告のみでほとんどまにあうからだと思います．

話が横にそれましたが，通勤時間が数分と1時間半（小生の日本での例）の差はまさに決定

的です．今のわが国の現状では小生のカナダで経験した生活は夢物語ですが，同時代にこのようにのんびりとしかも着実に暮している他国民をまのあたりにしますと，あこがれを通りこして，何やら腹立たしくなることすらあります．